

群馬パース大学保健科学部検査技術学科

藤田 清貴*

1. 大学の沿革と概要

群馬パース(PAZ)大学は、平成17年度に設立され、現在1学部3学科から構成されています。

設立の目的は、「豊かな教養と人間愛を備えた質の高い医療専門職を育成し、保健、医療、福祉サービスとの協働及び知の創造を通じて、国際社会、地域社会に貢献すること」にあります。平成10年に看護短期大学として群馬県北部高山村に開学した本学は、平成13年には地域看護学専攻科、翌年には理学療法学科を増設し、その後、平成17年に保健科学部看護学科および理学療法学科の1学部2学科という構成で四年制大学へと改組しました。さらに平成21年には、保健医療の実践者、指導者、教育者の育成を目的に大学院保健科学研究科修士課程をスタートさせ、平成22年4月に、北関東の交通交流拠点である現在の高

崎市の駅至近の地に新キャンパスを開設し主要な機能を移しました(写真1)。高山村キャンパスは、現在でも自然豊かな施設「星の降る郷セミナーハウス高山」として学生の合宿研修や一般の方々に利用されています(写真2)。

パースは、平和を意味するポルトガル語、PAZに由来します。同時にPAZには、この頭文字とする Pessoa(個性)、Assistencia(互助)、Zelo(熱意)の意味が込められています。

近年、高度に専門化・細分化された医療現場では、患者中心の全人的医療を実践するために医療専門職としての高い専門性と確かな技術力、さらには幅広い教養、倫理性を併せ持つことが要求されています。臨床検査領域においても同様であり、医療人としての倫理観に裏付けられた豊かな人間性と、診療支援ができる実践的な知識と技術を身に付け、検査値から病態を推測できる臨床検査技



写真1 看護学科・理学療法学科・図書館棟(1号館)



写真2 高山村キャンパス「星の降る郷セミナーハウス高山」

*保健科学部検査技術学科 fujita@paz.ac.jp

師の養成を望む声が大きくなっています。一方、臨床検査技師は、医療機関で活躍する以外に、生殖医療分野における臨床エンブリオロジスト、科学捜査研究におけるスペシャリスト、製薬・試薬関連企業での研究開発など、これまで以上に幅広い分野での活躍が期待されています。そのためには、高度な専門知識と応用能力をもち、科学的視野および技術で問題解決のできる Clinical Laboratory Scientist としての臨床検査技師の育成が急務です。そこで本学では、国家資格を取得するための教育ではなく、豊かな教養と実践的な知識と技術能力を身に付け、検査値から病態を推測し診療支援ができる臨床検査技師、および検査技術学を応用し Scientist として他分野で活躍できる臨床検査技師の育成を目的に「検査技術学科」(定員 60 名)を新設し、平成 25 年 4 月にスタートさせました。初年度は一期生としての自覚と夢を持った 66 名が入学し勉学に励んでいます。保健科学部における他学科の 1 学年の定員は看護学科 80 名、理学療法学科 60 名です。

II. 検査技術学科棟の概要と特徴

検査技術学科の新設に伴い、本館に隣接して新たに 6 階建ての検査技術学科棟(2 号館)が平成 25 年 2 月に完成しました(写真 3)。2 階、3 階には講義室 3 室、実験室 1 室、さらに学科会議室を設け、教員間のコミュニケーションを円滑にするとともに、教育の活性化を図っています。4 階、5 階には分析化学実習室(臨床化学検査実習、遺伝子検査学

実習、免疫検査技術学実習などで使用)、微生物学実習室(微生物検査学実習、医動物学実習などで使用)、形態系実習室(血液検査学実習、病理細胞検査学実習、臨床検査学総論実習などで使用)、生理学実習室(生理機能検査学実習、画像解析検査学実習などで使用)などの実習室をそれぞれ設けています。さらには、実験をとおして教員と学生間のコミュニケーションをより円滑にするとともに、検査技術学の基礎知識と最新技術の習得ができるよう、また教育・研究を十分に行えるための分析機器や高度解析装置などの設備を数多く備えています。具体的には、3 階の遺伝子解析実験室では遺伝子解析学を主体とした研究・実験ができる機器等が設置されています。また 4 階の生体試料分析実験室では生体試料分析学を主体とした研究・実験ができ、さらに 5 階の細胞・蛋白質機能分析実験室では、TOF/MAS システムによる最先端のプロテオーム解析や、二次元自動電気泳動装置、Flow Cytometer などによる細胞・蛋白質機能分析を主体とした研究・実験ができるよう最新の分析・解析機器が設置されています。6 階には、講師以上の専任教員に学生への教育・指導を円滑に行うため、個室の研究室を設け、助教および助手には共同の研究室を複数整備しています。さらに、学生がいつでも利用できる学生ゼミ室 2 室を設け、勉強や学生間のコミュニケーション活用に利用しています。

III. 検査技術学科における教育方内容および特色

検査技術学科では、臨床現場のさまざまな問題点に対処すべく、国家資格取得後、即戦力として診療支援ができる人材(Clinical Laboratory Scientist)、さらには検査技術学を Science の学問として追求し検査分野以外で活躍できる人材育成を目的とした特徴ある教育カリキュラムを取り入れています。具体的には、臨床検査医学のひとつのトレーニング法である「臨床検査解析学(Reversed CPC)」を必修科目としています。さらに、「検査異常値と発生機序」、「電気泳動分析病態解析学」など他大学ではない科目を新たな「臨床病態解析



写真 3 検査技術学科棟(2 号館)

検査学」に開講し、実践的な知識と技術の修得ができるようにしています。特に、電気泳動検査は血清蛋白異常症のスクリーニング法として日常切り離すことができない分析法にもかかわらず、一般病院ではあまり活用されなくなってきました。この原因として、医療保険制度改革の中で検査領域での点数の包括化が進んだことも大きな要因になっているかもしれません。しかし問題なのは、電気泳動検査が診断的価値の高い検査法で国家試験にも毎年出題されているにもかかわらず、臨床検査技師がそれを正確に判読し、臨床側へ報告する技術(診療支援)が低下してきていることです。こうしたことから臨床側のオーダーが減り、結果的に臨床検査技師の技術力を向上させる機会を失わせているといった悪循環が生じてきています。本学科では電気泳動解析学を専門とする教員と客員教授スタッフがそろっていることから、「電気泳動分析病態解析学」を開講することにより、電気泳動分析により病態解析ができるスペシャリストを養成できるものと考えています。

また、臨床検査技師の養成に係る教育によって培われる知識や技術は、医療現場のみならず、その他の分野で活用・応用されるべき能力の1つと考えます。そこで、本学科では、検査技術の専門的知識と技術を応用し、科学的な視野のもと Scientist として他分野で活躍できる臨床検査技師の育成にも力を入れることとしました。その1つとして、全国的にも珍しい「生殖医療技術学」という科目を開講し、両配偶子の発生、受精および受精卵(胚)発生のメカニズムを基礎学問として学び、ヒト生殖医療に貢献するために、その学問を

臨床に応用すべき倒立顕微鏡を用いた実践技術も取り入れ、将来、臨床エンブリオロジストとして活躍できる体制を整えています。

その他、最先端の検査技術が修得できるよう多くの専門科目の講義・実習を学内で開講するとともに、臨地実習は実践的な高度な知識と技術の習得を目指し、県内および関東甲信地区の先端高度医療施設を中心に実施します。さらに、12週間にわたる卒業研究により将来の医学・医療の発展に貢献できる科学的な評価能力および研究能力を養うことができるようにしています。

検査技術学科におけるこれらの専門科目を担当する教員は専任教員13名と客員教授5名です。専任教員の内訳は教授5名、准教授2名、講師1名、助教4名、助手1名です。最終的には准教授1名を加え合計14名を予定しています。このうち臨床検査技師免許を有する教員11名中7名が5年以上の臨床経験があります。また助教以上12名中11名が博士の学位取得者で、残り1名と助手1名は学位(博士)取得に向けて頑張っています。

IV. 今後の計画

現在、新学科として1年目であるため学内組織としては未完成ではありますが、地域貢献と今後の教育・研究体制をさらに充実させるために、社会人を対象とした病因・病態検査学領域の大学院修士課程を平成26年4月に開講スタート予定です。

今後も教職員一丸となり、夢のある教育・研究を目指し、学生と共に群馬パース大学および検査技術学科の新たな歴史をつくっていききたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。